

興雲閣塗装色調査結果（概要版）

平成 26 年 11 月 17 日 まちづくり文化財課

（調査実施：京都伝統建築技術協会）

今回の保存修理工事では建物全体を明治 45 年当時に復原することとしている。

修理前の塗装色は外部がグレーがかった白色、内部はベージュであったが、解体にあわせてペンキこそげ試験等の調査を行った。

1 外部塗装色

（1）史料及び古写真調査

明治 36 年 10 月 13 日付けの山陰新聞に、竣工時の外壁は淡緑色であったとの記載がある。また、明治 40 年頃撮影の写真を見ると、正面玄関周りの漆喰と比較してわずかに色が付いていることが分かる。

（2）ペンキこそげ試験

外部ペンキの耐用年数は約 10 年と言われており、劣化・退色により当初の塗装色そのままの色を見つけることは不可能であるが、明治 45 年に階段室を増築した際に新設された板壁及び、同工事に取り外されたと思われる板壁の木片をこそげ試験した結果、退色して白っぽくなっているが、薄い淡緑色が退色したものと考えられた。

（3）明治 45 年当時の仕上げ考察

竣工から 10 年後にあたる明治 45 年当時の外壁は薄い淡緑色であったと考えられる。

2 内部塗装色

（1）史料及び古写真調査

内部塗装色については史料や過去の調査報告書に記述がないが、大正時代の古写真を見ると、腰壁にペンキが塗られておらず、ワニス仕上げであったと思われる部屋があった。

（2）ペンキこそげ試験

内部のペンキは当初から剥がすことなく塗り重ねていたと考えられるので、最下層にあるものが当初のペンキだと思われる。

建具・建具枠は過半数が黄変していたが、黄変していない部分はわずかに緑がかった白い塗膜となっていたことから、当初は外壁同様の薄い淡緑色であったと思われる。腰壁を含めた変遷は貴顕室とその他の部屋で異なり、これをまとめたものは別紙のとおりである。

（3）明治 45 年当時の仕上げ考察

明治 45 年当時の塗装色についても別紙のとおりで、部屋によって仕上げが異なっていたと考えられる。

なお、2 階の貴顕室以外の部屋の腰壁は、解体調査結果によれば木目の見えるワニス塗りに復原するのが正しいが、現在の技術では古いペンキを剥離することが困難で復原できない。無理に剥離すると腰壁の部材を傷めるため、将来新たな技術が開発された時に改めて塗装を剥離して明治 45 年に復原することができるよう、該当の部屋のみ、復原可能な時代のうち明治 45 年に最も近い大正時代の色を塗り重ねることとする。